

ニンフェール第8回公演

七月に響

2012年7月7日(土)
19:00開演

中村 仁美

[箏]

Hitomi Nakamura, hichiriki

笹本 武志

[龍笛]

Takeshi Sasamoto, ryuteki

中村 華子

[箏]

Hanako Nakamura, sho

NymphéArt features Gagaku Trio

ニンフェール第8回公演

七月に響

2012年7月7日(土) 19:00開演

主催:ニンフェール、宗次ホール 後援:名古屋芸術大学音楽学部
企画・お問い合わせ:ニンフェール nymheart@yahoo.co.jp

主催:ニンフェール、宗次ホール 後援:名古屋芸術大学音楽学部
*このコンサートは、サントリー芸術財団の推薦コンサートです。

PROGRAM

プログラム

～ ごあいさつ ～

本日はお忙しい中、ニンフェアール第8回公演にご来場頂き、有り難うございます。

2005年の第1回演奏会から毎年続けられましたのも、ご来場下さる聴衆の皆様の暖かいご支援の賜物であり、心から御礼申し上げます。

今回の演奏会は、国際的に演奏、教育活動を行う伶楽舎のメンバーから、笹本武志さん、中村仁美さん、中村華子さんを迎え、雅楽トリオによる演奏会をお送りする事となりました。

今回の公演は7月7日であるということから、七夕、星、宇宙に関連した雅楽の古典作品、現代作品に焦点をあてたプログラムになっております。また、雅楽の楽器の特徴的で複雑な音色をじっくり聴いていただけますように、ソロ作品、トリオの作品を交えてお送り致します。龍笛奏者の笹本武志さん、名古屋芸術大学教授、田中範康さん、そして、原田裕貴さん、ニンフェアール代表の伊藤美由紀による4曲の世界初演作品も含まれています。

さらに、原田さん、伊藤作品には、それぞれ、原田昌明さん、ネイト・ペーゲルさんが、今回の作品のために星をテーマとした映像を制作して下さいました。七夕の日に、雅楽による宇宙的な響きの世界をご堪能ください。

古典

「平調調子」(ひょうじょうのちょうし)
Hyojyo no choshi

「五常楽急」(ごしょうらくのきゅう)
Goshouraku no kyu

「王昭君」(おうしょうくん)
Oushokun

一柳慧:「星の輪」笙のための(1983)
Toshi Ichiyonagi: Hoshi no Wa for sho (1983)

伊藤美由紀:「ベテルギウスの為に」雅楽トリオのための(2012) [世界初演] *a
Miyuki Ito: For Betelgeuse for gagaku trio (2012) [WP]

休憩

笹本武志:「Milky Way」龍笛のための(2011) [世界初演]
Takeshi Sasamoto: Milky Way for ryuteki (2011) [WP]

吉川和夫:「聖玻璃の風」箏築のための(2005)
Kazuo Kikkawa: Seihari no Kaze for hichiriki (2005)

原田裕貴:「Image」笙のための(2012) [世界初演] *b
Yuki Harada: Image for sho (2012) [WP]

田中範康:「変容の時」雅楽トリオのための(2012) [世界初演]
Noriyasu Tanaka: Moment of Metamorphosis for gagaku trio (2012) [WP]

[出演] 笹本武志(龍笛)、中村仁美(箏築)、中村華子(笙)

[映像] *a = ネイト・ペーゲル / Nate Pagel

*b = 原田昌明 / Masaaki Harada

PROGRAM NOTES

プログラムノーツ

「平調調子」

雅楽には現在六つの調子が残されています。調はそれぞれ中国の思想「陰陽五行」に当てはめられ、今日演奏致します平調は「秋」に属します。今では夏のイメージが強い七夕ですが、日本では元々お盆の行事の一環として行う意味合いが強かったようです。旧暦の7月7日はほとんど立秋以降になりますので、七夕は秋の季語にあたります。後に演奏いたします2曲も平調に属する曲ですので、まずこの平調調子を演奏し、会場をこの七夕の雰囲気であらためて満たします。

「五常楽急」

この曲は、雅楽の曲の中では越殿楽と並んで演奏されることの多い曲です。この楽曲は中国の唐の時代の皇帝、太宗(たいそう)が貞観(627～649)の末期に作ったと伝えられています。曲名は、「五常(五徳)」といわれる仁・義・礼・知・信(人の守るべき道徳)を宮・商・角・徴・羽の五音に配したところから、来ているとも伝えられています。たなばたの歌「五色の短冊♪」の五色の色も、「仁＝青、義＝白、礼＝赤、智＝黒、信＝黄」の陰陽五行からきています。

「王昭君」

タイトルの王昭君は古代に実在した女性の名前です。悲劇のヒロインとして、また古代四大中国美女の一人としても有名です。中国漢王朝の元帝(在位B.C47～33)が作り、日本に伝わったとされています。(中村華子)

一柳慧:「星の輪」笙のための(1983)

笙の音には、なにか人間の表現とは遠い次元の世界を感じさせるものがある。しかし一度その音を聴くと、それは魂の深淵からさし込んでくる1条の光のように、意識下で無限に続く響きとなる。時間を超越してなり続けるその響きは、音の変化をよりどころとする他の多くの邦楽器と異なり、宇宙的時間の創出につながるような音空間を現出させる。「星の輪」は、笙の音を光のイメージになぞらえて作られた曲である。それは笙の語りかけてくるもの如何に聴き取り、また私自身に問いかえすことができるか、ということへのささやかな答えだといえる。(一柳慧)

伊藤美由紀:「ベテルギウスの為に」雅楽トリオのための(2012) [世界初演]

オリオン座のベテルギウスは、地球から640光年彼方にあり直径が太陽の千倍という赤い巨星である。ベテルギウス爆発の前触れが観測され、いつ超新星爆発してもおかしくないと言われているという現実に触発されて、この作品を考え始めた。地球から現在見えているベテルギウスは640年前の姿であり、実際には既に爆発している可能性もあるわけである。640年後を想像する事は困難であるが、宇宙の中の地球、人間の小ささ、形あるものは全て滅びるといふ儚い現実を考えながら、雅楽特有の不安定な音程と特徴的な音色で、想像上の無限空間の中での音色、不安定な時間の伸縮を試みた。作品のなかでは、西洋楽器で使用される現代特殊奏法や尺八の奏法など伝統的な雅楽奏法とは異なる奏法とともに、持ちかえとしてレインスティック、風鈴、石などの打楽器や大箏を使用しながら、息づかい、呼吸を重視する事で、複雑なスペクトラ構成による神秘的な音色のジェスチャーにより宇宙への果てしない想いを描いた。640年後の雅楽の響きを想像しながら。(伊藤美由紀)

このビデオは、暗闇での人間の暗示的な動作により、地球の湾曲の地平線が夜空にゆっくり動く星に対する瞑想である。ゴッホの作品『星月夜』にも関連している。(ネイト・ペーゲル)

笹本武志:「Milky Way」龍笛のための(2011) [世界初演]

今回のコンサートの為に作曲。出来るだけ雅楽の世界観から脱したものにしよとのコンセプトのもと、曲名も英語表記とした。これまでの龍笛の現代作品が暗黙のうちに持っている“常識”を根底から無視し、スピードと躍動感を全面に押し出した。また、作曲家自身による初演なので、演奏の難易度を作曲において考慮しなかったため、相当なテクニックを要求する曲となった。全体の曲想としては、地上から見上げるMilky Wayではなく、一挙に宇宙空間に飛び、星々を作る川を自在に駆け抜けることをイメージした。第1楽章の「Twinkling」は、星々のきらめきと、その間を駆け巡る爽快感を表している。第2楽章の「Waltz」は、牽牛と織女がMilky Wayで踊る様子を表した。6/8拍子だが、アップテンポのワルツとして聞いていただきたい。(2011年11-12月作曲) (笹本武志)

吉川和夫:「聖玻璃の風」箏のための(2005)

箏は、作曲家にとって非常に魅力的な楽器であるとともに、独奏楽器としてはなかなか扱いつらい面もある。音域は狭いし、音量のコントロールも難しい。だが、古代の儀礼曲である「神楽歌」の「縫合」という曲は終始弱音で演奏され、舞楽のダイナミックなイメージとは異なった繊細さを醸し出す。また、武満徹が「秋庭歌一具」の「塩梅」という曲に書いた魅力的な箏の旋律は、箏の歴史を変えたと思う。中村仁美さんという名手を得て、箏はこれからますます多彩な表現が可能になるだろう。題名の「聖玻璃の風」は、宮澤賢治の詩「春と修羅」の一節による。「玻璃」はガラスのこと。「聖玻璃」でステンドグラスのことと解釈されるが、私には、そういった人工的な作物というより、もっと抽象的な光と風のイメージのように思える。三つの部分からなるが、楽譜上も切れ目はなく、続けて演奏される。2005年にアサヒビール株式会社委嘱作品として作曲、同12月20日アサヒビール・ロビー・コンサートで、中村仁美さんの演奏により初演。(吉川和夫)

原田裕貴:「Image」笙のための(2012) [世界初演]

この作品は、笙という楽器から漠然と想起された事象を表現しようとしたものである。天上へ昇るかのような楽器の音色はさることながら、竹の管が円状に配されたそのフォルムや、両手で包み込むように楽器を持ち演奏される独特なスタイルからも大いにインスパイアされた。また、書き始めるにあたって、ふとしたところから「呼応」という言葉の思いつきがあり、その言葉の持つ雰囲気も作品に反映させようとした。(原田裕貴)

笙の調に誘われて夜空に浮かぶ天の川のほんの一握りが舞い降りたそんなイメージで制作しました。(原田昌明)

田中範康:「変容の時」雅楽トリオのための(2012) [世界初演]

雅楽の魅力は、それが古曲であるにせよ、自然偶発的に生じるクリスタルな無調的響き、全方向に拡散する立体的な音響など、いつの時代でも、斬新な響きで人々を魅了してきたことにつぎ。従って、本作品は、古来から引き継がれてきた雅楽の伝統的な響きの織りなす美学を尊重しながら、今の時代にマッチングした音楽として、どのように新しい音像を作り上げることができるか、ということ自らの課題として書いた作品である。曲調の核となる音階(音列)組織も、古典的5音音階の匂いをあえて消さずに、様々な工夫を加え変容させてものを使用している。また、楽器奏法についても、際立った特殊奏法などをあえて使わず、歴史の中で完成された奏法のみで表現可能な範囲にとどめている。このように、基盤となっているオーソドックスなスタイルに加え、私が自ら想起したアイデアやシステムが予想通りに反映しきれたかどうか、本曲が単なる古典の焼き直しに終わるか、あるいは新しい雅楽の境地に一步踏み出すことができたかの境目であると考えている。最後に本日演奏していただく皆様に心より御礼を申し上げます。(田中範康)

ニンフェアール

2004年設立。ニンフェとは、フランス語で睡蓮(すいれん)の意味で、ギリシア神話の乙女ニンフともかけてあり、またこのニンフという単語はさなぎという意味もあります。アールはフランス語で、アートを意味し、私達はこの団体名のもとに、美しく新鮮で、これからの可能性を秘めた芸術作品を皆様にご紹介したいと願っております。これらのニンフェアール公演は、愛知県内外で好評を博し、これまでに朝日新聞、モストリークラシックなどの記事にとりあげられる。また、サントリー芸術財団推薦コンサートに度々選ばれるほか、発表された作曲メンバーの作品が、国内外(東京、ドイツ、デンマーク、アメリカ)で再演されるなど、一回の公演にとどまらない広がりを見せています。 nymphheart@yahoo.co.jp



笹本 武志 (雅楽・尺八・正倉院笛演奏家)

琴古流尺八家元・竹韻社の家系に育ち、東京藝術大学音楽学部邦楽科尺八専攻卒業、同大学院音楽研究科修士課程修了。尺八を笹本宗秀、二世初見宗郷、山口五郎の各氏に、龍笛及び雅楽演奏を芝祐靖氏に師事。雅楽(古典)の演奏を軸に、数百曲の現代音楽の初演を行っている。正倉院古楽器の排簫と雅楽尺八の製作と演奏を独学で学び、特に排簫はこれまで種々のタイプを製作し、製作・演奏の両面から研究を続け、楽器に負担を掛けずに音を響かせる「ボディボックス奏法」を開発し、復元楽器演奏のトッププレーヤーとして知られている。現在、龍笛・尺八・排簫のプロ演奏家として、国内及び欧米で演奏活動を行っている。また、自作曲の楽譜やCDが多数出版され作曲家としても名を知られている。主な著書に「はじめての雅楽」(2003年、東京堂出版)、「図説雅楽入門事典」(2006年、柏書房・共著)がある。現在、雅楽アンサンブル「伶楽舎」・琴古流尺八「竹韻社」に所属。北区子ども文化教室、ムサシノ雅楽教室・朝日カルチャー新宿校・ふくしま雅の会・龍笛ささの葉会・龍笛北楽会・ニューヨーク・コロンビア大学雅楽プロジェクト各講師。 <http://sasamototakeshi.com>



中村 仁美 (箏篋)

名古屋市立菊里高校音楽科卒業、東京芸術大学大学院音楽学専攻修了。大学の授業で雅楽と出会い、芝祐靖氏、大窪永夫氏らに雅楽全般と箏篋・楽箏・左舞などを学ぶ。雅楽古典の演奏だけでなく現代作品の演奏や、和洋さまざまな音楽家や舞踏家とのコラボレーションも積極的に行っている。1992年以来、箏篋リサイタル「葦の風」を開催して、箏篋のソロ曲・アンサンブル曲を多数委嘱初演。CD「ひちりき萬華鏡」(ALM)に収録している。国内公演の他、ミュージック・フロム・ジャパン音楽祭、ウルティマ現代音楽祭などに参加し、コロンビア大学(米)でも指導している。小学校などでのワークショップ演奏も行う。伶楽舎メンバー。国立音楽大学、沖縄県立芸術大学非常勤講師。2010年松尾芸能賞新人賞受賞。 <http://www.gagaku.jp/hitomi-hichiriki/>



中村 華子 (笙)

国立音楽大学音楽学学科卒業。在学中より雅楽を学ぶ。笙を宮田まゆみ、多忠輝、楽琵琶を中村かほる、雅楽合奏を芝祐靖に師事。平成18年度文化庁新進芸術家国内研修生修了。現在「伶楽舎」に所属し、古典雅楽はもとより、現代の作曲家による作品にも取り組み、国内外で幅広く演奏活動を行っている。これまでに、「ミュージック・フロム・ジャパン」「ウルティマ音楽祭」「アジア音楽祭」「北杜国際音楽祭」「MITO音楽祭」「文化庁本物の舞台芸術」などに参加。



伊藤 美由紀 (作曲)

愛知県立芸術大学、マンハッタン音楽院修士課程修了後、コロンビア大学(ニューヨーク)で作曲をトリストラン・ミュライユに師事、博士号を取得。文化庁芸術家在外研修員としてIRCAM(フランス国立音響音楽研究所)にて研鑽を積む。世界各国のコンクール、音楽祭に入賞、入選し、国内外で作品の発表を続けている。また、ニンフェアール、JUMPの代表として自主企画公演を定期的に展開。「時の砂」がALCD80からリリース。ミラノのスヴィーニ・ゼルボーニ出版社からフランコ・エヴァンジェリステイ国際作曲コンクール優勝作品『古代の息吹をしのぶ。。。』の楽譜出版。執筆活動として、「音楽現代」に「トリストラン・ミュライユの音楽的思考」と題して連載、メキシコのコンピュータ音楽雑誌「Ideas Sonicas」に自作品の分析論文(英語)が掲載。現在、名古屋芸術大学、千葉商科大学、愛知県立大学非常勤講師。 <http://www.miyuki-ito.com>



田中 範康 (作曲)

東京生まれ。国立音楽大学作曲科並びに器楽科卒業。作品は、NHK-FM、アメリカ、韓国などの放送メディアや、国内はもとより、ドイツ(ボン、ベルリン、ヴァッサーブルク)、オーストリア(ザルツブルク)、フランス(パリ)、北欧(コペンハーゲン、オスロ)、韓国(ソウル、テグ、マサン)の音楽祭などで、広く紹介されている。オーストリアのVMM(Vienna Modern Masters)レーベルから室内楽作品集(Noriyasu Tanaka Chamber music)として、1994年にVol. I (VMM2011)、2002年にVol. II (VMM2036)の2枚のアルバムがそれぞれリリースされている。近年では2011年2月にALM Recordsから、2002年から2009年までに発表された代表的な室内楽作品が、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のメンバーや日本を代表するアーティストの演奏により、「田中範康作品集」としてリリースされた。現在、名古屋芸術大学音楽学部、同大学院音楽研究科教授。日本現代音楽協会会員。日本作曲家協会会員。



原田 裕貴 (作曲)

名古屋芸術大学大学院音楽研究科修了。在学中より映画、舞台、ゲーム、TV-CM等の音楽制作に携わる。第1回TIAA全日本作曲家コンクール審査員特別賞受賞。現在、名古屋芸術大学、岡崎女子短期大学、中部楽器技術専門学校非常勤講師。 <http://yukiharada.com>

原田 昌明 (映像)

愛知県立芸術大学大学院美術研究科デザイン専攻修了。名古屋の映像プロダクションを経てフリーに。企業PV、資料映像など映像制作を請け負いつつ、映像やLEDなどを使ったインスタレーション作品を制作。「予感」~ Vorgefuel ~ 2011 Tenri Kulturwerkstatt ケルン、KYUHOISHIKI 2011 常懐荘、60×60×8 2010名古屋大学教養教育院プロジェクトギャラリー「clas」など。現在、名古屋芸術大学、名古屋商科大学、大同大学非常勤講師。

ネイト・ペーゲル (メディア・アーティスト)

サンフランシスコ在住のアメリカ人メディア・アーティスト。ライス大学(ヒューストン)、シドニー大学大学院卒業。アップルコンピュータ社で働いている間に、実験的なマルチメディア作品制作を始める。メディア・アート作品は、23カ国以上で展示され、コスタリカ、イタリア、オーストラリア、アメリカでは、テレビで放映され、60以上の受賞がある。国連、サンフランシスコ現代美術館(SFMOMA)、世界自然美術館、シャリール・ダンスカンパニー、カバシトル・ダンスカンパニー、プラネット・マガジンなどから作品委嘱があり、ビデオ、サウンド、グラフィック、ウェブ、バーチャルリアリティ、インタラクティブテクノロジーを使い、振付師、作曲家、ビデオアーティスト、デザイナーなど様々な分野のアーティスト達とコラボレーションを行っている。